

令和6年度一関市観光審議会 会議録

- 1 会議名 令和6年度一関市観光審議会
- 2 開催日時 令和6年7月19日（金） 午前10時から午前11時40分まで
- 3 開催場所 一関市役所 2階 大会議室A
- 4 出席者
  - (1) 委員  
出席 伊藤利幸委員、遠藤史佳委員、坂田真樹子委員、  
佐々木賢治委員（会長）、柴田博之委員、千葉セツ子委員、  
千葉敏則委員、船山賢治委員（副会長）、松本数馬委員  
欠席 丹野麻琴委員
  - (2) 事務局 石川隆明副市長、小野寺正寿商工労働部長、  
渡辺恭弘観光物産課長、鈴木敏宏観光物産課長補佐兼観光係長、  
佐々木浩二観光物産課長補佐兼物産係長、  
森本瞳観光物産課観光係主任主事、  
阿部茉友花観光物産課物産係主事

5 議 事

- (1) 会長、副会長の選出について
- (2) 一関市観光振興計画の推進について

- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者の数 2人（報道機関）
- 8 挨拶

石川隆明副市長

本来であれば市長が参りまして皆様方にご挨拶を申し上げるところですが、公務が重なっておりこの場には私が出席させていただくこととなりました。

皆様方には観光振興をはじめとして、市政にご協力をいただいておりますことに対しまして御礼を申し上げます。

また、本日の審議会は4月に皆様方にご委嘱を申し上げたところであり、本日が具体的にご審議いただく場になります。当市のこれまでの観光振興に対する取組の進捗状況などをご説明申し上げ、今後の観光施策に生かしていきたいと思っておりますし、そのような趣旨での内容になります。

さて、観光と一口で申し上げましても色々な面に観光というのは社会経済の中に影響があると捉えております。本日の新聞紙上でも訪日外国人が、上半期で過去最高というような報道がされておりました。今、円安の状況であり日本

に来やすいことが影響していると分析されています。その消費額が3か月間で2.1兆円という報道内容でありました。

これは、このような今の観光に対する海外から日本に向けられる関心が高いものがあり、それを地方都市でもいかにその目を向けて人を呼び込むか非常に大きな課題であります。

また、一方では観光公害というようなこともあります。当市ではそのような話は聞こえてきていないところでもあります。観光は地元経済にとっても非常に影響が大きく、広い裾野に対する好影響をもたらす要因を大きく持っている分野でもありますので、当市のみならず近隣市町村と手を組んで、そして県内関係機関・団体と連携しながら、今まで以上の取り組みをしていかなければならないと考えております。

皆様方には日頃それぞれの分野で考えていること、気になることなどがあると思いますので、この場では忌憚のないご意見をいただきたいと思っています。

今日はどうぞよろしく願いいたします。

## 9 議事

### (1) 会長、副会長の選出について

委員から事務局一任との発言があり、事務局案として会長に佐々木賢治委員、副会長に船山賢治委員を提案し、委員から承認された。

### (2) 一関市観光振興計画の推進について

資料に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 一関市観光振興計画の目標指標について、令和5年度実績で既に目標値を達成しているが、新たな目標を示すのか。

事務局 現時点では設定していないが、今年度以上に増加を目指していきたい。

委員 令和4年度から令和5年度に急激に伸びているが、海外の観光入込向けの事業で顕著に効果が現れた取組を紹介いただきたい。

事務局 一番は、新型コロナウイルス感染症が5類に移行し行動規制が緩和され、日常が戻ったことで、それぞれの地域で行われていた祭り等のイベントが通常開催になったことが大きい。

また、昨年、花巻空港や仙台空港へ台湾からの定期便が再開されたこと、ニューヨークタイムズ紙で盛岡市が紹介されたこともあり、岩手県への注目度が高まった。

このほかに、円安等の影響も大きく、様々な要因で増加に繋がった

ものと思われる。

委員 他のエリアではオーバーツーリズムにより地元の方々が悩む事象があるが、宿泊可能人数と比較して目標数値はまだ余裕があるのか。

事務局 現時点では、オーバーツーリズムに関しての意見はいただいていないが、首都圏や関西等では、ごみや騒音など様々な問題が取り上げられている。

当市においては、そのような状況にまでは達していないが、このような部分も対策として必要に応じて検討してまいりたい。

委員 新幹線の利用状況は、コロナ前と比較すると100%まで達していない状況であるが、この数字をみると外国人の方が多くお越しいただいている。外国人の方は曜日に関係なくお越しいただいているので、情報共有しながら、かつ効果的に継続できるような取組を考えていきたい。

委員 コロナ明けで首都圏など一度訪れているところにもう一度訪れている状況である。そこから次のステップとして地方を訪れる状況である。外国人観光客のうち台湾から訪れる割合は7割で残り3割を占める客層が増えてきている。円安の影響で今までにない国から訪れているので、そのようなところへのプロモーションが大事である。

委員 今後の受入体制とプロモーションについて、Suicaを活用していくところが課題と感じる。JRで積極的に取り組まれているが、駅からさらに二次交通の部分でストレートに予約ができ乗れるところまで、JRと連携しながら取組を進められればと思う。

委員 Suicaについては、列車に乗るだけではなく、買い物にも使用できる。また、バスに乗車する際にも使用できる状況である。それは、地域連携ICカードと呼ばれるもので、岩手県交通ではIwate Green Pass、岩手県北バスではiGUCAがある。

海外の方が日本に来た時に、現金で支払いをする人はいない。クレジットカードもいろいろな種類があるが使えたり使えなかったりするときに、Suicaは乗り物や買い物に使用できるところを改めて紹介したい。

また、群馬県の事例を紹介するとGunma Passがある。これは観光客向けだけではなく地元の方々も使用している。Suicaとマイナンバーカードを連携することで地元自治体の補助金など事務的に

苦勞してきた部分もあると思う。例えば、キャッシュバックやポイントバックというような形で有効活用できる。そこに国の補助金を活用できる情報もあり、参考に紹介させていただければと思う。

会 長 二次交通で困っていることは、バス会社が違うことで各種バスカードが使えないことである。

また、二次交通は本数が少ない。列車にしても通勤や通学時は充実しているが、観光で移動する昼間の時間帯は本数が少ない。

委 員 一ノ関駅で観光案内をしている。舞川のあじさい園が開園中であるが、バスが3本しかない。1本乗り遅れると次のバスまで時間がかなり空く。先日は、定員オーバーで乗車できなかった観光客がいた。

会 長 時期によっては空席が目立つ時もある。

委 員 事前予約のシステムを組み合わせ、この時間若しくはこの便に何人の予約の情報があるか事前に分かり、運行を調整できるのではないか。今後、このようなコントロールと鉄道と駅の結節点で連携する形が望ましい。

南三陸町では、トヨタと連携し、デマンド交通に取り組んでいる。紫波町では、しわまる号が運行している。

委 員 一ノ関駅前のイルミネーションについて、期間が3月20日まで開催することとなり、正月に来た観光客がもう一度一関に来ることができると喜んでいて。それをPRするのに何か表示できないか。広報でも掲載しているが目立つところに期間を掲載してはどうか。

委 員 イルミネーション事業については、一関商工会議所青年部が中心になって実施している。JRにご協力いただき3月までの期間実施しているので、点灯期間がわかるような表示を検討するように話をする。

会 長 イルミネーションについて市内では、室根町津谷川地区のほか、各地域で実施している。冬季の観光といえば温泉とスキーだけなので、周遊できるように組立てができればよいと思う。

委 員 全国もちフェスティバルについて、去年は5年ぶりに実施され、1万個のもちまきを実施した。今年は2万個を目指して計画している。今回の位置づけをしっかりとシティプロモーションをして広げていくことにしたので、地元の業者もやりやすく出店したい声がある。改善しながらやっていきたい。

委 員 藤沢野焼祭開催負担金について、令和元年度から約半分の参加者数

で、課題として少子高齢化により自治会の参加や協賛金の減少が著しく祭りの存続が懸念されるとのことであるが、課題を踏まえて、どのように継続実施していくのか。

事務局 やはり、コロナ明けということで昨年は通常開催されたが、担い手の高齢化や若者の減少というところで、各地域の祭りの継続運営自体が難しくなっている。

この部分については、負担金のほかに広告収入や自治会からの協力により実施しているが、それぞれ祭りごとに実行委員会をもって協議されている。

開催に当たり、その中で課題を協議し改善しながら進めることとしている。

会長 これは藤沢に限った課題ではなく、各地域の祭りやイベントでも心配されることをよく聞く。

委員 日本全体をみれば外国人の方がかなり多く訪れている。当市も外国人入込客数が目標に達している状況であるが、現場の実感としては、インバウンドは増加しているが、国内の団体旅行客が少ないのと個人客も少ない。要因としては、連休中は高速道路の割引がないこと、燃料の高騰などがある。

委員 昨年、紅葉期のお客様が一番来なければならない時期に、昔のような賑わいは感じられなかった。コロナがだいぶ落ち着いたにもかかわらず、このような傾向であった。社内的に分析したのは、天気の問題と紅葉の情報である。スマホなどで情報を収集し、行っても見られないのであれば、はじめから行かないと判断する。

いろんな情報を事前に把握することができるので、それに対してお客様の反応が過敏になっていると感じる。

また、働く方々が減少している傾向にあり、これは当方だけの問題ではない。先ほどのお祭りの話や、花火の開催ができなくなっている状況など、担い手の方々が減ってきている。その中で継続していくにはどのようにしたらよいのか。お客様を呼ぶことは大切だが、受入れ態勢が整っていないと今後、大変な時代が来ると思う。

今後、働き手がいなくなった場合に宿自体の経営は本当に大変になってくる。その中で、1泊2食の宿泊施設として経営しているところが、人手の問題で食事の提供が難しくなるなど、それぞれ直面してく

る。例えば、宿と温泉の提供はして、食事は市内で地元の料理を提供するシステムを作るなど、その移動に関してはタクシー会社に協力していただく。このようなことを今後は考えていかなければならない。

目標数値には達しているが、これからの問題はこのようなことを重点的にやっていったほうが良い。

委員 タクシー業界では、コロナ前と比較すると昨年の秋頃までは順調に回復してきていたが、12月頃から落ち込み始めた。また、2月、3月はコロナ禍に近いような落ち込みであった。原因が何か研究してみたが、一つは乗務員不足が関係している。台数的には変わりはない。稼働率はいくらか下がっている。

盛岡地域は、売上げの規模が違うが、コロナ前の売上げより15%程度伸びている状況である。

一番感じていることは、今の二次交通はバスやタクシーにしても観光地と観光地を結ぶ線だけの感じがする。昨年、一昨年とオンデマンドを実施し、タクシーでS u i c aも使えるようにした。やはり、このような方式にすれば、線ではなく面にした二次交通が補完できるのではないかと感じた。これを365日毎日運行するとかなりの費用が発生するが、最終的にはオンデマンドが観光でも地域の足を守る理想だと思う。

委員 祭時大橋の震災遺構に関して、骨寺荘園遺跡から巡ってくるお客様が多い。しかし、祭時大橋の震災遺構の場所は大型バスは入れないしトイレもない。展望台はあるが向かいの震災遺構の場所は木が伸びてしまいよく見えない。このような状況なので、説明する際は以前の写真を使用している。

事務局 現場を確認して、関係部署と調整する。

会長 最初は整備するが、それを継続して環境整備することは難しくなってきた。

会長 ガイドに関して、新しい方々は入ってきているか。

委員 ガイドの会は現在30人ほどである。高齢の方もおり、実際に歩くと必要になる。実際に活動できる人は12人ほどである。

また、2年に一度、養成講座を開催しており、今年がその年になっている。

委員 広域連携推進事業費について、今後の方向性として、若者などが気

軽に参加しやすいSNSを活用したフォトコンテストとして開催することとしているが、若者などが気軽に参加しやすいとは、どのような意味か。また、年代的にどれくらいをイメージしているか。

事務局 若い方々はスマートフォンやタブレットを気軽に操作することができ、応募しやすいという意味合いでこのような表現としている。年代的には20代から30代を想定している。

委員 この質問の意図は、高校生の授業に何校か入っているが、高校生から市内で遊ぶ場所がないとの意見をよく聞く。高校生は移動手段が限られることから、高校生も気軽に参加できるように配慮してほしい。

委員 インバウンド推進事業費について、台湾からの旅行者が現在70%ということであるが、事業者には旅行会社との接点をもっていただきたい。日本東北遊楽日に出展することはよいが、実際に事業者が台湾に行くことに対する支援のほうが良いのではないか。行政の職員は2年か3年で異動してしまうが、事業者が直接関係性を持つことが、結果的に誘客に繋がると思う。

委員 来年度に大船渡線開業100周年を迎えるが、そこに向けて計画しているものがあれば教えてほしい。

事務局 今年度においては、機運醸成事業として一関市観光協会へ委託し、のぼり旗や手旗の制作、記念プレツアーを予定している。

来年度に向けては、今後、一関市観光協会や関係団体と連携しながら検討してまいりたい。今年、北上線が100周年を迎えるので、参考にしながらどのような取組が効果的なのか検討してまいりたい。

委員 一ノ関駅としては、来年度に大船渡線開業100周年となることから、イベント等の企画は来年度に集中するイメージである。しかし、地元の方々はプレイベントからスタートしたいという話であるので、連携しながら進めていきたい。

委員 以前、よぶのる一関を実施されていたが、運用状況を教えてほしい。

委員 デスティネーションキャンペーンの6か月間を実施したいとのことと進めてきた。基本的には巖美方面の1路線で始めたが、当初6か月間は別のシステムだった。

実際にスタートしたときには、観光客は少なかった。むしろ、地元の方々が利用し始めた。Suicaの利用を推奨していたが、地元の方々が利用することで、現金でも取り扱うこととし、6か月間の予定

が1年半実施した。ジャンボタクシー3台で運行していたが、経費の関係もあり冬期間は2台で運行していた。

6か月が経過し、紫波町で実施している「しわまる号」のシステムを導入した。大船渡線との連結からの二次交通として、試験的な部分もあり1年半まで延長した経緯がある。

委員 ここに来る目的があり、ツールとして鉄道がある。今は鉄道より自動車になっており、沿岸地域は無料の三陸自動車道がある。しかし、高齢化により免許を返納する方々の移動手段について、今の話が解決の糸口になるのではないかと思っている。

10 担当課 商工労働部観光物産課